
口ウきゅーぶたさん

米寿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロウきゅーぶたさん

【Zコード】

Z3361Y

【作者名】

米寿

【あらすじ】

幼い頃のケガでバスケットボールをすることを諦めてしまった少年、柴田流。

バスケを諦めた流は自堕落な生活を送り続け、いつしか『ぶーちゃん』と周りの友達から呼ばれるようになった。

跳べないのではなく、跳ぶことを止めたこと。

そんな「こぶたは」とある少年と少女たちと出会い。

バスケに一生懸命な人たちに触れた、「こぶたは…」。

これは、電撃文庫口づきゅーぶーの一次創作です。

プロローグ ～ボクが「ふたになつた日～（前書き）

プロフィール

柴田流しばたながれ

身長：167cm

体重：88kg

血液型：A型

愛称：ぶーちゃん

好きなこと：バスケットを見ること

嫌いなこと：バスケットすること

最近のマイブーム：オンラインのRPGで仲良くなつた人とのチャ

プロローグ ～ボクが「ぶたになつた日～

お父さんの仕事がお休みの日で、ボクたちの家族は牧場に遊びに行つた。

そこでは牛の乳しぼりを体験できるらしいへ、お父さんは前から行くのを計画していたらしく。

お姉ちゃんとボクもそれを聞いてすぐ楽しみにしていた。だから、牧場に着くなり早く早くとお父さんとお母さんの腕をとつてお姉ちゃんとボクは乳しぼりの体験へと引っ張つて行つた。

「予約していた柴田ですけど。」

「はい、お待ちしてこました。」
「ありがとうございます。」

「ねー、お父さん。牛さん?・牛さん?・?」

「牛さん?・?」

「うーうー。慌てる感じがない。ここ子としてお姉さんと着いて行けば、牛さんのところに連れてこつてくれるからな。」

「うーうー。」

「あらあら。こんな時だけ素直なんだから。」

「それでは」案内しますね。」

元気よく返事して係りのお姉さんの後に着いて行くお姉ちゃんとボクを見て、お母さんは笑つていた。

「 」これが今日牛乳を搾らせてくれる牛なんです。」

「 」「うわあ～。」

「 立派なもんだな。」

「ええ。 そうね。」

お姉ちゃんとボクは牛のあまりの大きさに思わず声が出してしまった。

お父さんとお母さんも牛の大きさに驚いていたみたいだつた。

「 それじゃあ、お姉ちゃんのせつからいやつてみましょうか。 まあ、私がお手本を見せるのでその通りにやつてみてね。」

「 はーい。」

ボクは先に出来るお姉ちゃんがちよつぴり羨ましかつたけど我慢した。

お姉ちゃんはこつもボクに優しくしてくれるし、お父さんやお母さんに叱られた時も庇つてくれたりしたから、そのお礼だ。

「 ……とこな感じです。 大丈夫かな？」

「 大丈夫ですー。」

説明を聞き終わったお姉ちゃんが、牛のお乳のどひんじゅがみこむ。

お姉ちゃんのこどで考え方をしていたボクは、係りのお姉さんの

説明をよく聞いてなかつたから、お姉ちゃんがするのを見て真似すればいいやと思った。

「えっと……親指をお乳の根っこのところに……。」

「がんばれよー。」

「言われた通りにやるのよー。」

お父さんとお母さんがお姉ちゃんを応援する。ボクも心の中でお姉ちゃんを応援した。

お姉ちゃんは、それに応えるみたいに勢いよく指を動かした。

「えい！ わあ！ ホントに出たあー！」

お姉ちゃんは係りのお姉さんに教わった通りのやり方でお乳を搾り出した。

でも、あまりに勢いが強すぎたせいか牛の体が少しふくっとなつたのにボクは気が付いた。

それと同時にボクの体は動き出していた。

「えつーー？ きやあー！」

「お姉ちゃん！ー！」

牛が体をよじつてお姉ちゃんを振り払おうと足を振り上げた。

ボクはお姉ちゃんの体を突き飛ばしてそれを庇うように前に出た。そこから先の事はよく覚えていない。凄い衝撃と熱さを右肩に感じてボクは意識を失つた。

次に気が付いた時には病院のベッドの上にいた。

「…………」悲しい顔をしたお父さんとお母さん。泣きながら、「ごめんね、ごめんねと謝り続けるお姉ちゃんがいた。

「ボクはどうなったの?」

訳がわからないボクはみんなにそう聞いた。
でも、誰も答えてくれなかつた。だからボクはもう一度聞いてみることにした。

「ねえ、ボクはどうなったの?」

「…………」家族の皆様。ここは私から。

知らない人の声がするほうに首を傾けると、白衣を着た男の人が立つていた。

きっとこの人はお医者さんなんだろ?。

「君はお姉ちゃんを庇つて右肩をケガしてしまつたんだよ。」

そつか。

あの時、ボクは牛が暴れだすのに気が付いて飛び出したんだつけ。

「君のおかげでお姉ちゃんはケガをしないで済んだんだ。」

良かった。

ボクはお姉ちゃんをちゃんと守れたんだ。
でも、なんでお父さんもお母さんも泣きそうな顔をしてるの?
お姉ちゃんが泣いたままのはどうしてなの?。

「その代わり、君のケガした右肩はもともとどうなかつたんだ。」

え？

「手術は成功したけれど、肩の骨を痛めてしまつていて、右手が肩より上にあげられなくなつてしまつてしているんだよ。」

え？え？

「普通に生活する分には特に問題は無いけれど、スポーツを続けていくのは難しいんだ。」

え？え？え？

「…………バスケ…………出来ないの…………？」

混乱するボクが口に出来たのはそれだけだった。

「…………すまない。」

この一言でボクのバスケットボール生活は終わりを告げた。それは、ボクがミニバスクラブのチームのレギュラーを勝ち取つて、最初の大会に臨むちょうど一週間前の出来事だった。

プロローグ ～ボクが「ぶたになつた日～（後書き）

お疲れ様です。

米寿です。

性懲りもなく新連載を開始しました。色々中途半端なのは重々承知ですが、書きたい、読んでもらいたいと思い立つたので始めました。

大変ご迷惑をお掛けしますが応援して頂けると嬉しいです。

scene・i ～じぶたの日常～（前編）

プロフィール

柴田
楓しばたかえで

身長：160cm

体重：43kg

血液型：A型

好きなこと：弟とするバスケットボール

嫌いなこと：弟とできないバスケットボール

最近のマイブーム：お母さんみたいなおいしい料理を作るための料理の勉強

scene・1 ～じぶたの日～

カーテン越しに入つてくる朝日が眩しい。

現在の時刻はAM 6:30。後つけようとしたらコレビングへ降りて行かなきやいけない時間だ。

「…………眠い。」

昨日学校から帰つて來た後、夜こばんとお風呂に入る以外はゲームをしていて徹夜だ。

新しく発売したRPGでついつい歯止めが効かずにやり過ぎてしまつた。

まだまだ、やつていたいけど時間が時間が時間なので仕方がない。

「…………ふう。」

軽く息を吐いて重い体をノロノロと起こす。首を捻るとバキバキと骨の鳴る音がした。

右肩を庇いながらゆっくりと伸びをして固くなつた体を解していく。

そんな風にしていると、部屋の扉がノックされ、ボクに声がかけられる。

「母さんが朝御飯できたつて!」

「…………うん、分かつた。」

お姉ちゃんがいつも通りに呼びに来て、それをボクがいつも通りに答える。

トットツトツと小気味よく階段を降りていく音がする。その音が聞こえなくなつてから、ボクは静かに扉を開いて部屋の外へ出た。部屋から出ると朝のいい臭いがする。夜にあれだけお菓子を食べたのにすっかりお腹はペコペコだ。

階段を降りてリビングに着くと、既に朝のせんがテーブルの上に並んでいた。

「…………おはよう。」

「おはようー。」

眠さ全開のボクの挨拶に元気全開の挨拶でお姉ちゃんが返してきた。朝一番のこれは、徹夜明けのボクにとってはかなり堪える。

「おはよう。またゲームやつしたの？」

「…………まあね。」

「ほらほらにね。」

「…………はあい。ふあーああ。」

お母さんとも挨拶し終わったボクは、あぐびを隠すこともせずにそのまま椅子へと座つた。

さつかりと重たい腰を降ろして、眠い目を擦りながら、テーブルの上に置かれている家族写真に挨拶をする。

「…………お父さんもおはよう。」

お父さんは今、別の県へ単身赴任中で今は家に居ない。だから、これで食卓に家族全員が揃つた事になる。

ボクの家ではよつほどのことが無い限り、皆が揃つてから「せんを食べる事になつていてる。

それを面倒に思つときもあるけど、守らないとお母さんが泣きやうな顔をするから、結局守つてる。

「それじゃあ、いただきます。」

「いただきます!」

「……………」

眠さと戦いながら朝ごはんをもそもそ口へ運ぶ。んー。つまー。

相変わらずお母さんの料理は絶品だ。量が少しずつ減るのが珠に傷だけど…。

「ね!流?流つてばー!」

そんなとつとめのないことを考へてみると、お姉ちゃんがボクを呼んでいた。

眠い時に考え事をしてたせいで気が付くのが遅れてしまつたらしい。

「……………ん。何?」

「今日は一緒に学校行こ?」

「お姉ちゃん朝練あるでしょ。ボクはギリギリまで寝てから行って。」

「そっか……。うだよね……。何言ってるんだい。あはは……」めんね?」

「謝りなくていいよ。お母さん、ギリギリになつたら起こしてね。」

そう言つてボクは席を立つた。

お母さんが何か言いたげにしてたけど、それを無視してボクは自分の部屋へと向かった。

扉を開けて、そのままベッドへと倒れ込む。その衝撃でギシギシヒベッドが音を立てた。

「…………はあ。寝よつ。」

目を閉じて眠気に身を任せむ。徹夜明けのせいか、直ぐに意識が遠くなつていく。

意識が途絶える瞬間、ボクはベッドの側で力無く笑いかけるお姉ちゃんの顔を見た気がした。

scene・1 ～じぶたの日常～（後編）

私事ですが、職場でのストレスからか、白髪と抜け毛がヒドイ。

本当におじいちゃんへの階段を登り始めました、どうも、米寿です。

お疲れ様です。

少しでも楽しんで頂けたなら嬉しいです。

宜しければ、また、お付き合いくトセー。

御一読あつがヒツジやれこましだ。

scene・1　～じぶたの日常～（前書き）

プロフィール

柴田朱美

しばたあけみ

身長：162cm

体重：シークレット

血液型：A型

好きなこと：お料理

嫌いなこと：家族が揃わない食卓

最近のマイブーム：娘にお料理を教えること、息子が好きなお菓子作り

時間になつてお母さんと一緒に起られるままに家を出た。ボクが通う慧心学園は近くのバス停からスクールバスが出ている。これに遅れると大変なことになるから、いくら眠くても我慢しなきちゃいけない。

朝のお姉ちゃんとのことがあって、ボクの足どりはとても重い。出来れば学校を休んで一日中ゲームをしてたいぐらいだ。そんな事を考えながら歩いてようやくバス停に到着すると、ちよつとバスがやつてきた。

「…………おはようございます。」

「はい。おはよう。」

運転手さんにあいさつをして、のそのそと席へ向かう。適当に空いている後ろの席に座るのつかなと思つて通り過ぎようつとした前の席から声がかけられた。

「おい、柴田。隣空いてるからこりゃ座れよ。」

「…………ああ、竹中くん。おはよう。んん？竹中くんなんでバスに？」

彼の名前は竹中夏陽。^{たけなかなつひ}慧心学園男子バスケットボール部、通称男バスのキャプテンをしている。

竹中くんとは以前ちょっとした縁があつて、今は友達同士だ。でも、竹中くんの家は慧心学園の近くで、普段はバスに乗つていることはないはずなんだけど。

「おう、おはよ。まあ朝からちょっと用があつてな。……ってお前スゲー眠そうじやんか。ビーセまたゲームでもやつてたんだろ?」

「朝から大変だね。そして、竹中くんにはお見通しかあ……ふあ～あ。」

「つたぐ。そんな」とより早く座れよ。バスが発車しちまつ。」

「うん。ありがと。」

せっかく誘つてもうたんだし、ありがたく座らせてもうね。ボクは座席に深々と体を預ける。このバスの椅子はふかふかで寝心地がとてもいいから、学校に着くまで寝ていよ。竹中くんがいるから着いたらきっと起こしてくれるだろ。じ。

そんな勝手なことを考えながら口を閉じよつとしたボクを見透かす様に、竹中くんが話しかけてきた。

「寝んなよ。色々話あんだから。」

「…………学園に着いてからだと話にへここと?」

「ああ。まあ……な。」

いつもストレートな竹中くんにしては珍しく歯切れが悪い。ボクを隣の席に呼んだのは、この話をするためだったんだろ。嫌な予感がするし、眠いけど、聞かないなんて出来きる感じじゃなさそうだ。

だって、竹中くんの目がすまなそうにボクを見つめているから。

「…………いよ。それでなんの話?」

「俺たちこの前の地区大会で優勝して、県大会に出ただろ？」

「うん。」

「でも、県大会じゃボロ負けだつた。あんな悔しい思いをするのはもうゴメンだ。」

竹中くんはその時の気持ちを思い出したのか、ギリッと奥歯を噛み締めた。

ボクもその場にいたから分かるけど、レベルの違いを見せつけられた、それだけが残る試合だつた。

「うん。」

「だから、もっと練習して強くなりたいって、柴田が休みの時に顧問に相談したんだ。」

バスケが好きで、負けず嫌いな竹中くんらしい提案だ。

そして、話の流れが読めてきた。なんとなく次の展開を予想できる。

だから、ボクは先に自分の口から言つてしまつことにした。

「それで顧問と美星先生みぼがもめて、収まりがつかなくなつたんでしょう？」

美星先生は最近出来た女子バスケットボール部、通称、女バスの顧問の先生。

男バスの顧問とは仲が良くないので、ことある毎に衝突を繰り返している。

「そりなんだよ。それで結局、体育館の使用権を賭けて女バスと試合をする」とになつたんだ。」

「そつか試合か。」

「理屈や話しあいじゃなくて、勝負でちやんと白黒つけるつてところが、美星先生らしい。」

「女バスが勝てばこれまで通りに体育館の割り当ては週3日ずつ。俺たちが勝てば6日もらえる。」

この条件だけ聞けば、勝つても今まで通りの練習時間を守れるくらいで、女バスにメリットがある様には見えない。
つまり、美星先生がこの勝負を受けた、もしくは受けざるを得なかつた理由があるはず。

それが、竹中くんがボクにこの話をするのをためらつた理由にもつながつてゐる。

「女バスが負けたら…………廃部だ。」

「そつか。」

「…………ああ。」

女バスは部員が五人しかいない。そしてボクも竹中くんも女バスの部員みんなと同じクラスで顔見知り。そして、経験者一人を除いてみんな初心者だ。

普通に考えれば女バスに勝ち目はないし、このまま廃部になつて

しまつだろつ。

竹中くんはこの学園でボクがバスケしていたのを知つていて、辞めた理由も知つていてる数少ない人だ。 面倒見が良くて根が優しい竹中くんは、ボクと同じ想いを女バスのみんなにもさせてしまつんじやないかつて思つてる。

でも、二度と悔しい思いをしないためにもつと強くなりたくて、だから迷つている。

竹中くんがボクと出会つていなければ、きっと迷わないでいられたはずだ。

「試合はいつやるの？」

「再来週の日曜日。」

「勝つて練習時間が増えるといいね。」

なら、竹中くんの背中を押すのが、今のボクの役目だ。バスケすることを勝手に諦めてしまったボクのために、竹中くんが悩むことなんてない。

「おうー。」

ボクがそう言つて安心したのか、笑顔で力強く返事を返してくれた。

それをみてボクも安心した。これ以上、ボクが誰かのバスケの重荷になるのは嫌だったから。

「つーか、柴田。他人事みたいにしてるけどお前にも関係あんだからな。お前、男バスのマネージャーなんだぞ？」

「………… そうだったね。」

「そうだったね、じゃねーよ。それになんだよ今の間は？」

「あはは。眠くて少しボーッとしてやつただけだよ。」

「ならこゝけどな。今日も練習あるんだから眠くても来いよ。」

「うん。分かつたよ。」

ボクの返事を聞いた竹中くんは満足そうに頷いた。
その顔を見てボクは、とっさに出口になつた、バスケをやれな
い人が来てもしょうがないといつ言葉を飲み込むしかなかつた。

「いろいろ悪かつたな。着いたら起きてやるから寝ろよ。部活
に来れなかつたら意味ねーし。」

窓の外に顔を向けたまま、竹中くんはボクにそつ言つた。きつと
照れ隠しなんだろうけど、バレバレだ。
でも、せつかくの好意だから甘えさせてもらおうと思つ。

「じゃあ、ヨロシク。お休みなさい。」

「ああ。」

眠い中、いろいろ考えたせいか、目を閉じた瞬間に強烈な睡魔に
襲われた。

もちろん、ボクは抵抗せずに身を任せて、深い眠りへと落ちてい
つた。

眠りに落ちる直前、三度寝できるなんて贅沢だなーと密かに思つ

た。

scene・1　～じぶたの日常～（後書き）

代車の鍵を紛失し、明日は土下座まつじぐらの米寿です。

お疲れ様でした。

御一読ありがとうござります。

プライベートが非常に波乱に満ちていますが、がんばりやります
ー私。

ではでは、また宜しくお願ひ致します。

scene・1　～じぶたの日常～（前書き）

プロフィール

柴田良秋

身長：185cm

体重：78kg

血液型：B型

好きなこと：家族旅行

嫌いなこと：単身赴任

最近のマイブーム：夕食時、家族とのテレビ電話で一緒に食卓を囲むこと

三度寝なんて贅沢なことをしても、ボクは寝こままだった。徹夜でのゲームとバスでいろいろ考え」としたからか、サッパリ頭が回らない。

そんな訳で、ボクは竹中くんの後をフラフラしながら付いていく。顔を上げてはいるものの、まぶたが重くて視界がぼやけていて定まらない。

おまけに息まであがってきた。正直…キツイ。ボクのクラスまでこんなに遠かつたかな。

「おい柴田、そろそろ教室着くぞ。」

竹中くんにさわされて、首をあげて教室にあるクラスのパートを確認する。

「…じ。間違いない。やつと着いた…。」

「はあ…ふう…。かなりの…道のりだったね。」

「…いや。大した距離じゃねーし。」

教室に着いたという達成感を込めたボクの言葉に、竹中くんは呆れた目でつれない返事を返す。

竹中くんにとつてはなんでもない距離だらつけど、ボクにとつてみれば結構な距離。

校門から教室までなんて、体育の50m走に匹敵するつていうのは言い過ぎだけど、それくらい疲れる。

「つたぐ。ちよつとは運動しろよ。そんなんだから、あんなあだ

「名で呼ばれるんだぜ？」

「ボクはインドア派だよ。それに、あのあだ名は嫌いじゃないから別にいいんだけど。」

「はいはい。んじゃ、さっさと教室入るーぜ。」

「うん。」

運動した方がいいってことはよく言われる。そしてそのたびにボクはインドア派だと答える。そして、ボクと話をしたり、体型を見てみんなは大体納得してくれる。

君は確かにインドア派だねって。もちろん例外な人もいるけど。ドアを開ける竹中くんに続いて教室に入ろうとした時、前から大きな声がするのが聞こえた。

「やべー。紗季が怒った！逃げるー！」

「待て！バカ真帆！」

「うおーー？」

金色に近い栗色のツインテールを振り乱した女の子が、勢い良く飛び出してきた。

竹中くんは、持ち前の反射神経でそれをなんとか身をよじってかわした。

竹中くんがなんとか、かわしたそれを死角になっていたボクがかわせるはずがない。

ぶつかる瞬間、女の子と目があつた。お互い、これから起ることに予想がつくけど、もうどうしようもない。

「「あ。」」

そんなマヌケな声をあげて、ボクは女の子の下敷きになつて倒れ込んだ。

廊下に後頭部がぶつかつて視界がチカチカする。息がつまつたみたいで上手く吐き出せない。

このまま、意識を失つてしまえば授業を受けなくていいし、眠れて一石二鳥じゃないか。

よし。そうしよう。では、お休みなさい。

「ふーちゃん！大丈夫！？ねえ！起きてよつ！」

ボクのどうしようもない考えは、女の子の必死な叫び声にかき消された。

前もどこかで、こんな風に誰かに呼ばれた気がする。
ああ、あの時だ。

起きなきや。起きないとずつとお姉ちゃんは泣いたままだから。後頭部がチリチリしだして痛みが戻ってきた。でも、眠気覚ましにはちょうどいい。

「…………大丈夫。ケガはない、三沢さん？」

「ふーちゃん！……よかつたあ……。」

「柴田つー大丈夫かつー？」

田をあけるとクラスメイトでボクにぶつかつた三沢真帆さんと竹中くんが心配そうな顔で見つめていた。

大丈夫だつて言つたのに一人とも心配性だ。後頭部は確かに痛い

みさわまほ

けど、ただそれだけ。

「柴田くん。大丈夫？」

声がかけられた方に視界を移すと、眼鏡をかけたおさげのクラス委員長、永塚紗季さんも心配そうにボクを除き込んでいた。

なんだか、騒ぎが大きくなりそうな予感がしたボクは、重たい体を起こすことにした。

それにボクみたいに大きいのがクラスのドアをこれ以上塞いだら、みんなに迷惑がかかつてしまつ。

「ボクは大丈夫。心配かけてゴメンね、永塚さん。今、起きるよ。といつても三沢さんがどうしてくれないと起きられないけどね。ははは……。」

「あ……ゴメン……。」

「いいよ。よつーふつー！」

三沢さんにじこでもらこ勢いをわざと勢いをつけて起き上がる。こうでもしないこと、三沢さんはいつまでも氣にしてしまつ。今だつて俯いているせいで、トレーデマークのツインテールが元気なく垂れ下がっているし。

後はもう一度、ボクが三沢さんになんともないことを伝えればそれで済んじやう話だ。

「…………行こうぜ、柴田。こんなやつのことなんか気にする」とねえよ。」

立ち上がったボクの腕を竹中くんが引く。

ボクの腕を掴んだ竹中くんから静かな怒りの気配を感じる。それもかなり怒ってるみたいだ。

ボクは大丈夫だし、三沢さんにもケガがなかつたんだからそんなに怒ることないと思うんだけどな。

「なんだよ、夏陽！ どーゆー意味だよっ！」

「ふん… 言葉通りの意味に決まつてんだろ。」

売り言葉に買い言葉。 前からよく言い合^ひになる」とはあつたけど、女バスが出来てからは特にそれが目立つようになった。

「竹中くん、そんなにキツく言わなくとも… ボクはこの通り大丈夫だつたんだし。」

「真帆、落ち着きなさい。」

だからボクは二人の間に割つて入つた。永塚さんも三沢さんと竹中くんに距離をとらせるために間に入る。

それでも一人は睨みあつたまま。一人は前からよく言い合いになつたりすることがあつたけど、女バスが出来てからは多くなつた。

ここにいる永塚さんも含めて三人は幼なじみだ。竹中くんは、真帆は前から気に入らなかつたつて、よく憎まれ口をたたいていたけど、ここまでハッキリ怒るなんてことはなかつた。

「気付いてないみてーだから言ひとくけど。」

「なんだよ。」

「お前が、おかしいと思わなかつたのか？」

「何をだよ？」

「柴田がお前の下に倒れたことだよ。」

「それは、アタシがすげースピードでふーちゃんに突つ込んだからだろ？」

「はつ。」

三沢さんの答えを竹中くんが鼻で笑つた。そんな簡単なことも分からぬのかとバカにした感じだ。

それを見た三沢さんがヒートアップ。間にいたボクと永塚さんを押し退けて竹中くんへと詰め寄る。

「言いたい」とがあるなら、ハツキリ言えよ夏陽…」

「ちよつと真帆…落ち着きなさいって…夏陽もなんで挑発するわけ？」

三沢さんを止めに入つて、竹中くんへを諫めようとした永塚さんを、竹中くんは無視して言葉を続けた。

「柴田はな、お前を庇つて自分から後ろに倒れたんだぞ。」

「え？」

「いくらじきなりお前が突つ込んできたからつて、柴田とお前じや体格が違すぎる。普通にぶつかれば、お前が吹つ飛ばされるに

決まつてんだろう？それじゃ、お前がケガするかもしねーから、柴田は自分から後ろに倒れたんだ。そんなことも分かんねーのかよ？」

竹中くんはそう一気にまくし立てた。

詰め寄つていた三沢さんから勢いが消え、頬りなげな瞳がボクに向けられる。その瞳は、ボクに本当なの？と言外に問いかけている。正直に言つべきか、ボクは迷つた。そもそもこうなるのが嫌だから、何度も大丈夫だよつて言つたんだ。けど、竹中くんはそれを見過ごしてはくれなかつた。うーん。どうしよう？

「おはよー。つて、入り口に集まつてどうした？」

ボクが三沢さんになんて声をかけていいか迷つていると、担任のたかむらみほ 篠美星先生たかむらみほが教室へと入つてきた。

なんてタイミングの悪さだ。篠先生は基本的にいい人なんだけど、関わると何かと事態が面倒な方向にいつてしまつことをボクは去年から知つていた。そして、この法則に例外はないといつことも。

「ちようど良かつた。柴田が真帆とぶつかつて頭打つたから、保健室に連れて行つてやつてくれよ。」

「ホントか？柴田、大丈夫か？」

「いや。ボクは大丈夫……。」

「いいから行つて来い。」

ボクの意見は竹中くんに遮られてしまつた。やつぱりこうなつちゃつたか。三沢さんのことは気がかりだけど、しうがない。

「まあ、この流れに逆らへないと困れないし、おとなしく黙つ」とを聞いておいた。

「分かった。詳しい話は柴田と、後で真帆と竹中にも聞く。それじゃ、行くよ。」

「はー。」

「そうだ、紗季。」

「なんですか？」

「私はホームルーム遅れるから、ヨロシクな。」

「分かりました。」

そんなやり取りを終えて、ボクは篁先生と一緒に教室を後にした。教室から出ていく時、何か言いたそうな三沢さんの顔が見えたけど、ボクはおとなしく保健室についていくしかなかつた。

scene・1　～いじふたの口算～（後書き）

職場で自分の歓迎会が開かれたことになつたと喜んでいたら、実は自分プロトコースだつたといつ瞬に愕然とした米寿です。

お疲れ様です。

御一読ありがとうございます。

今回の話、真帆好きの方いらっしゃいましたらすいません。

因みに私も真帆派なので書いていて辛かったです。そんなことは聞いてないですか…ですよね。

ではでは、またまた。

ガールズ・トーク～休み時間～

【智花】 真帆、元気ないね。どうしたの？

【真帆】 うーん。朝からちよつとマズイことやつちやつたんだよね。…。

【愛梨】 それって、もしかして柴田くんが保健室に行っているのと関係あるのかな？

【紗季】 そうよ。朝、真帆が柴田くんとぶつかっちゃってね。一步間違えば真帆がケガしたかもしれないんだけど、柴田くんが庇ってくれたおかげでケガせずに済んだのよ。

【ひなた】 わー。ふーはイイ人。

【紗季】 そうね。でも、真帆がその時にひなたと謝まりなかつたせいで、夏陽が怒っちゃって…。

【智花】 そんなことがあったんだ…。

【真帆】 そうなんだよ。それにちゃんとお礼もしてないしさ。ふーちゃん、みーたんに保健室にすぐ連れて行かれちゃたし…。

【愛梨】 それなら、笛で真帆ちゃんを助けてくれてありがとうって言つに行くのはどう、かな？

【ひなた】 おー。あいり、ナイスアイティア。ついでに『ふーの好きな給食もお付けする。

【紗季】 わーい。いい考えだと感づる。

【真帆】 給食持つて行けばふーちゃん喜ぶだろ？ 、謝りに行けて一石二鳥だ！ 早速みーたんに聞いてこよー。

【紗季】 ううつとー真帆待つたなとこー… つて、行つちやつたわ。

【智花】 あはは…。

【紗季】 でも、柴田くんには本当に感謝してるわ。もし、真帆がケガしたら、今度の試合出られなくなつてたから。

【愛梨】 そうだね。柴田くん男バスのマネージャーさんなのに助けてくれたんだもんね。

【ひなた】 おー。ふーはいつも優しい。ひなの苦手なもの食べてくられたことある。

【智花】 それは何か違つ氣がするけど…。それじゃあ、真帆が戻つて来たら改めて保健室に行こー。

【三人】 おー！

今、ボクは保健室のベッドにいる。

朝のことを見先生に説明して、保健室の羽田野先生に診てもらつて特に問題なかつたので、とりあえず安静にということになり、ベッドで寝ることになった。

ボクがもともと朝から眠かつたのもあつて、意識は一瞬で落ちた。目が覚めたのはついさつきで、理由はお腹が空いたからだ。体を起こして、保健室の時計を確認する。既に時間はお昼休みが半分ぐらいなつていて、朝から随分時間が経つてしまつていて。どうりでお腹が空くわけだ。

そこでボクは重大なことに気がついた。それは、この時間にボクの分の給食が残つてゐるのかということだ。慧心学園の給食はなかなかおいしい。それを逃すなんてことは絶対避けたい！

よしー！ そつと決まれば早速行動開始だ。膳は急げもとい、善は急げ。

「羽田野先生。もう大丈夫そうなので、教室に戻ります。」

先生に声をかけたのだが反応がない。ベッドの前のカーテンを開けるとそこには誰もいない。

なぜいない！ 勝手に出ていくわけにもいかないし、これじゃあ給食が食べられない！ … 終わりだ。もう何もかもが… 終わりだ。

「ははっ… ははは… はあ… 寝よつ。」

ノロノロとした重い足どりでベッドまで戻り、中に入り直す。

いつもなつたら、部活の時間になるまで具合が悪いことにして寝てしまおう。給食といつ学園での楽しみを奪われたんだから、それく

らいしてもバチは当たらないはずだよね？食べ物の怨みは怖いって言葉もあるくらいだし。

ベッドの前のカーテンを閉め、1日に五度寝といつ快挙？を成し遂げようとするボクを、扉をコンコンとノックする音が阻止した。

「「「失礼します。」「」」

「しつ、失礼します。」

「おー。しつれいします。」

保健室に声が響く。その声にボクは聞き覚えがあった。そして、誰が来たのかをだいたい予想できた。

「ふーちゃん、起きてる？」

「うん、起きてるよ。」

この遠慮がちにかけられる声は三沢さんだ。
寝たまま出迎えるわけにもいかないので、ボクは体をベッドから起こしてから返事を返した。

「カーテン開けるわよ？」

「うん。」

このハキハキした感じの声は永塚さんのだ。

ボクの返事を待つてからゆっくりとカーテンが開けられる。
開けられたカーテンの先には五人のクラスメイトが立っていた。

そこにいたのは、ボクの予想を裏切らず、慧心学園女バスのメンバーだった。

「ふーちゃん！ホントに」「めんなさい！」

ボクの姿を見るなり、いきなり三沢さんが謝つてきた。

突然の謝罪に驚いたボクは、呆気にとられてすぐには返事をすることができなかつた。

「あたしからぶつかつて、ふーちゃんにケガさせたのになちゃんと謝れなくて…あーーうまく言えないんだけど、『めんなさい！』

三沢さんは頭を下げながら、また謝る。

わざわざそれを言つたために来てくれたんだ。やつぱりあの時、一言声をかけておけばよかつた。そしたら、余計な心配をかけずにすんだのに。

でも、それはもう過ぎたことだ。折角謝りに来てくれたんだから、キッチリ謝罪の気持ちを受け取つてこの件は終わりにしてよ。

「わざわざ謝りに来ててくれて、ありがとう。三沢さんも謝つてくれたから、この話はこれでおしまいしよう？」

「うん！ありがとう、ふーちゃん！」

向日葵みたいな元気な笑顔で三沢さんが頷いた。
いやいや、なんとか一件落着。

でも、そうすると気になることがある。ただ謝りに来るなら三沢さんだけよかつたのに、女バスのメンバーが全員で来たのはなんでだろ？

「ふー、まだ、あたまいたいの？」

ボクを『ふー』と呼んだのは、はまだ袴田ひなたさん。

ボクが頭の中で自問自答している顔を見て、痛みに顔をしかめた
と思つたんだわ。

袴田さんは、ふわふわした髪を、ふわふわさせて、ふわふわと近
づいて来て、ボクの顔を覗きこんだ。

「ううん。もう大丈夫。」

「おー。それならよかつた。」

いけない、いけない。自分でこの話はおしまじって言つておきな
がら、心配をかけたら本末転倒だ。

それに、なんで皆が来たのかだつて、考えるんじやなく、直接聞
いてしまえば済む。

「皆が来てくれたのは嬉しいんだけど、どうして皆で来たの？」

「えつと、ね。美星先生と羽田野先生にし、柴田くんがお腹すか
してゐるから、保健室に給食を持つて行つてつて、た、頼まれたから
…それと…。」

「ほ、ホント…？」

「ひやうー」

給食という単語に自分を抑えられず、香椎さんがいいかけた言葉
を遮つて、つい大きな声が出てしまう。

保健室に給食を持ってきていいのかとか、色々シッカリ断はある

けど、ありがたく頂くとしよう。

でも、その前に驚かせてしまつたことを謝らなきゃいけない。

「『Jめんね、突然大きな声出して。』

「ううん。ちょっとビックリしかやつただけだから…。」

ボクの謝罪に、俯きながらも、ちゃんと応えてくれたのは、香椎
愛莉さん。ボクも背は高い方だけど、香椎さんはそれよりも少し高
い。

でも、本人はそのことをとても気にしていて、今も大きな体を小さく小さく縮こませている。

「トモ。柴田くんは我慢の限界みたいだから、早く給食を渡してあげましょ。」

「あ、うん。でも、ベッドに持つていくと汚しちゃうかもしねないから、机に置くね。」

永塚さんにトモと呼ばれたのは、湊智花さん。

女バスで唯一のバスケ経験者。普段はとても大人しそうな雰囲気をしているけど、バスケの時はまるで正反対の空気を纏う。始めてそれを見た時、本当に驚いたのを今でもボクは覚えている。それぐらい湊さんの変わり身は凄かった。

「ありがとうございます、湊さん。」

「うん、どういたしまして。」

ボクはベッドを抜けて待ち焦がれた給食のもとへ向かう。ここから給食が置かれた机までの距離さえもどかしい。それぐら

い、ボクのお腹は空腹を訴えていた。

辺り着いたボクを迎えてくれたのは、サンディッシュとホワイトシチューにサラダ。どれもとてもおいしかった。

「いただきます。」

聞きたいこともあるけど、空腹をこれ以上我慢できない。そんなに時間もからなにから、ちょっと待つてもらうとしたよう。ボクは挨拶をして、皆がいるのに構わずもの凄い勢いで給食を食べ始めた。サンディッシュもシチューもサラダもみんな内になくなつていく。

そんなボクの様子を五人は驚いた顔で見つめていた。

「ふう……」

サラダの上に乗っていたトマトを口に放り込んで飲み込み、食後の挨拶で締める。

おいしかった。お腹もいっぱいになつたし、いつも番椎さんが言いつられてたことを聞いてしまおう。

「給食持つてきてくれてありがと。それで、番椎さんつまんてつて、みんなどうしたの？」

「どうしたのじゃなによつて。ふーひやん食べるの早すぎだからつて！」

「やうかな？」

「柴田くん。血覚無いのね……。」

勢いよく捲し立てる三沢さんとヤレヤレと肩を竦める永塚さん。お腹が空いてる時、ボクはいつもこの調子だし、竹中くんも特に何も言わなかつたから変だと思っていなかつたけど、ビリやう違つらしへ。

「一人だけじゃなくて他の三人も、ウンウンと頷いているのがその証拠だ。これからはもう少ししゃつくり食べることにしよう。」

「ボクの食べ方はこの際のこととして、さつき香椎さんは、ボクになんて言おうとしたの？」

「えつとね。私たち柴田くんにお礼がしたくて来たんだよ。」

「お礼？」

「うん。朝のこと聞いたよ。真帆をかばつてありがと。」

聞き返すボクに、香椎さんの後を引き継いで、湊さんが答えた。

「今度、男バスと試合があるのは柴田くんも知つてるよね？」

「うん。」

「私たちは五人しかいないから、誰か一人でもケガしたら試合が出来なくなつちゃうところだつたの。柴田くんは男バスのマネージャーなのに、真帆を助けてくれた。だから、皆でお礼を言いに来たの。本当にありがと。」

「」「」「「ありがと。」」「」

そういつて女バスの皆は頭を下げた。

頭を下げるボクは困ってしまった。体が勝手に動いただけで、たまたまそれが三沢さんを庇つたという結果につながつただけ。

でも、女バスの皆からしてみれば、ボクが三沢さんを庇つた結果、ケガをせずに済んだわけだから、感謝しているし、お礼を言いたい。そうだった。自分のしたことが相手にどう思われるかなんて、結局のところ受け取り方次第なんだって、そんな当たり前のことをボクは忘れていた。

いや、忘れていたかっただけだ。ボクとお姉ちゃんは、それで変わってしまったから。

ダメだ。この思考の流れはマズイ。こんなことを考えても何もいいことなんてないし、皆とお姉ちゃんを重ねるなんてやつちやいがないことだ。

「どういたしまして。わざわざ、あつがとい。もう授業始まるよ？ ボクは後で行くから皆は先に教室に戻つて。」

だからボクは、思考の流れを絶ひきつゝ、皆に素直にお礼を言つて、保健室から遠回しに帰る様に誘導した。

ボクがそんなことを思つているなんてことを知らないうちは、頭を上げて笑顔でボクを見た。

「じゃー後でね、ぶーちゃんー！」

「柴田くんも遅れないようにね。」

「おー。ふー。あとでね。」

「えへへ。それじゃ、失礼します。」

「それじゃあ、教室でね。柴田くん。」

そして、女バスメンバーの皆がそれぞれに挨拶をして保健室を出て行く。

全員が出て行つたのを確認して、ボクは深く息を吐いた。

「…………なんか、疲れたなあ。」

録に授業も受けでない上に保健室でさつきまで寝ていたはずなのに、思わずそう咳してしまった。朝のお姉ちゃんとのやり取りや、竹中くんの相談に三沢さんのこと。まるで、停滞しているボクを急かすように、何かの歯車が回り始めたように感じる。もちろん考えすぎなのかも知れないけど、あまりにタイミングがいい。

きつと今日の部活でも何かありそうだ。なら、少しでも休んだほうがいい。

「はあ……先生が戻つて来るまで、もう一眠りしよう。」

そう勝手に結論付けて、半ばヤケクソ気味に、ボクはさつき阻止された一日に五度寝の自身最高記録へ挑むことにした。

いつもは至福を感じるベッドの中でも、ボクのモヤモヤした気持ちは晴れそうになかった。

Sentence 1 - じぶたの日常～（後書き）

自分の歓迎会なのに絡み酒のバイトに捕まり、あげく逆ギレされた米寿です。

お疲れ様です。

御一読ありがとうございます。

お酒の力恐るべし。

飲んでも呑まれない様に気を付けなきゃいけないと思わせてくれるいい教訓になりました。

そんな米寿はスーパーの駐車場で爆睡。危うく仕事に遅刻しそうになりました。

皆様もくれぐれもご注意を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3361y/>

ロウきゅーぶたさん

2011年11月17日20時20分発行